

2021年12月12日 説教「エッサイの根から」

イザヤ書 11章 1~10節

今朝は来主日のクリスマス礼拝を覚えながら、預言書であるイザヤ書から学んでいきます。

1. 若枝が出て実を結ぶ (1~5節)

- ①エッサイの根株 (1) **「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」**イザヤは紀元前740年頃に20歳前後の青年で、預言者として召されました。イザヤを通して、多くのメシヤ（救い主）預言がなされています。メシヤ（救い主）の誕生預言がここにあります。エッサイは紀元前千年ぐらいの人です。エッサイには8人の息子がいて、ダビデはその末子でした。メシヤである子は、エッサイの家から若枝が芽を出すようにして生まれ、やがて結実すると預言されています。
- ②主の霊が (2~3) **「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、」**その子のうちにとどまるのは主の霊でした。悪の霊と完全に対立する霊です。その霊は知恵、悟り、はかりごと、能力、主を知る知識、主を恐れる、そういう霊でした。要するにまっすぐと主とつながっている霊です。「この方（メシヤ）は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず」とあります。この方は主を主とすることを喜びとし、その方の判断は目で見える表面的なことや、耳で聞く表面的なことでは結論を出すことないのです。物事の本質に光をあてられるのです。
- ③主の正義をもって (4~5) **「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。」**「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す」とありますが、その方は主から授けられた正義に基づいて、身寄りのなく弱い者にご配慮を示し、貧しい者に対しては公正を旨として、慈しみを示してくださるのです。一方その方は、悪に対しては、口のむち、唇の息で、さばきをなさるのです。「正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。」とありますが、エペソ書にも「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てをつけ (5:14) とあります。メシヤは正義をもって、人間の内面や現実生活を支えてくれるのです。

2. 平穏な世界 (6~9節)

- ①狼は子羊と (6) **「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏**

し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子供がこれを追っていく。」「狼は子羊とともに宿り、彪は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子供がこれを追っていく。」正義が支配するときに備えられる平和の光景は驚くべきです。狼と子羊が一緒にいても襲わない。彪と子やぎとはともに伏して仲良くしている。子牛と若いライオンと太った家畜がともにいて、それぞれが穏やかで、子供達がそれらを追い回しているというのです。究極の平和です。

②雌牛と熊 (7~8)「雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」「雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。」さらに、雌牛と熊と一緒に草をはみ、それは次世代にまで及ぶというのです。さらに、ライオンは牛といっしょになってわらを口にしているというのですから、頬がゆるみます。さらに、「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。」生まれて間もなく、乳で生きている小さな子が恐ろしいコブラの巣である穴の上で戯れている。少し成長して乳離れした子は、毒をもつまむしの子をこわがらずに手を差し伸べるというのです。危険そうですが、こだわりのない友好関係がそこにはあるのです。

③聖なる山 (9)「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害をえず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」主が支配する聖なる山においては、弱肉強食はなく、主を知ろうとする信仰の心が広く、海をおおう水のように地に広がっていくというのです。主なる神を知ることとは何と大事なことでしょうか。

3. エッサイの根 (10 節)

①国々の民の旗 (10)「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち」その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち。メシヤである方が生まれるその時に、「エッサイの根」すなわちダビデの家は、国々のなかにあって旗を立てるといいます。マタイの福音書をご覧ください。その冒頭において、イエスの家系が記されています。それはアブラハムに始まり、エッサイ、ダビデを経てイエスに至ります。その旗は立てられていたのです。

②彼を求め (10)「国々は彼を求め」そして、イエス・キリストの福音は、世界へと宣教されて、国々の民はメシヤすなわち、イエス・キリストを求めていくという預言は実現しました。今や世界の多くの国々の民はキリストを求めています。愛と平和の主である救い主は、

国々の民の希望となっています。

③栄光に輝く (10)「彼のいこう所は栄光に輝く。」キリストがいらっしゃるその周辺は、栄光に輝くというのです。「栄光」というのは、神の尊厳、卓越性、完全性を示し、神がともにいてくださることを示しています。つまり、その方のいらっしゃる場所は光と恵みと平和で溢れているのです。

《結論》

現実の世は罪に満ちています。争いごとは絶えず、憎しみや妬み、偽りや怒り、不品行や汚れ、分裂や分派、そういったものが溢れかえっています。創造主なる神が侮られ、人間中心の偶像神がはびこるのです。

ですから、現実の世には6節から9節に表現されているような世界はないのです。すなわち、狼が子羊と共にいて、ひょうと子やぎが仲良くしている、羊とライオンと一緒にいて、小さい人間の子どもがこれらの動物の後を追っていくという図はありえないのです。さらに、雌牛と熊が仲良く草をはみ、その子どもたちも一緒なのです。肉食のライオンが牛のようにわらを食べ、人間の乳飲み子は恐ろしいコブラのとぐろを巻くあたりの穴の上で遊んでいるし、少し大きくなり乳離れした子が毒をもつまむしの子に手を伸べるというのです。罪が支配する世では、残念ながらこうした光景はのぞむことができないのです。

それでは、どうしてこのような預言の言葉が記されているのでしょうか。変な言い方ですが、預言の言葉だからこそ、このような預言の言葉が記されているのです。到底ありえないような世界が語られていますが、そこは美しく、喜ばしく、希望に満ちている理想の世界なのです。このような絵に描いたような世界が示されればこそ、希望も生まれてきます。望むべき方向性もわかってきます。たとえば、月に向かうロケットは、月という目標があるから、そこに向けて真っ直ぐと進みます。この預言の言葉にはそのような目標となっているのです。

どうしたら、私たちはこの目標の地に向けていくことができるのでしょうか。ここに預言されているメシヤにこそ鍵があるのです。エッサイの根株から出るメシヤ(救い主)にこそ、その目標の世界へと進ませる秘密があるのです。「その上に主の霊がとどまる」とありますが、メシヤは主なる神ご自身なのです。創造主なる神であればこそ、人間が進むべき方向や、道筋を正確に示してくださるのです。ですから、メシヤを見出すことが人間とその群れにとって重要になるのです。9節には「主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たす」とありますが、メシヤなる方を知ることが、有り得ないと思われる場所

に向かう鍵となるのです。

今日、私たちは新約聖書の時代に生きています。すでにこのメシヤは現れてくださいました。イエス・キリストこそ、その主です。その方は私たちのために馬小屋でお生まれくださいました。野ゆり会で学びましたが、へりくだりの主は生まれた時から謙遜であられたのです。そして、一生涯この姿勢によって歩まれたのです。そして、ついには私たちが救われるために、私たちの罪の身代わりとして、十字架刑を受け死んでくださいました。そして復活してくださいました。この方を受け入れ、信じた者は神からの特権を与えられるのです（ヨハネ1:12）。それは、あの理想的な場所に進むロケットに乗船したようなものです。待降節の朝、イエス・キリストにしっかりとつながり、隣人との永遠の平和の道を目指して歩んでいきましょう。

1. エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。
2. その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。
3. この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、
4. 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す
5. 正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。
6. 狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子供がこれを追っていく。
7. 雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。
8. 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。
9. わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。
10. その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

①若枝が出て (1)「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」(1)

②主の霊が (2~3)「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」(2) その子のうちにとどまるのは他でもなく主の霊でした。悪の霊と完全に対立する霊で、その霊は知恵、悟り、はかりごと、能力、主を知る知識、主を恐れる、そういう霊でした。要するにまっすぐと主とつながっている霊なのです。「この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって